



現代社会学部

春までに読んでおきたい！

大学生活に役立つ

オ ス ス メ 図 書

※書籍の価格は実際と異なる場合があります。購入される場合は各自ご確認ください。

オススメ
01

ボランティアって なんだっけ？

岩波ブックレット 猪瀬浩平 著
本体価格580円

豊かなボランティア経験を持つ著者が、ボランティアの3原則「自発性」「無償性」「公共性」について、やさしく、でもうんと濃く考え、記した最新の論考。ボランティアに関心がある人もない人も、すべての人に読んでほしい1冊です。

オススメ
02

教育という病

—子どもと先生を苦しめる
「教育リスク」

光文社新書 内田良 著
本体価格780円

私たちが当たり前のように「善きもの」として受けてきた教育には、実は様々な負の側面＝「教育リスク」が存在します。本書では、社会調査によって得られたエビデンス(科学的根拠)を駆使し、学校教育における組体操、2分の1成人式、運動部活動、柔道といった取り組みに潜むリスクを検証・解明しています。

オススメ
03

21歳男子、 過疎の山村に 住むことにしました

岩波ジュニア新書 水柿大地 著
本体価格780円

法政大学現代社会福祉学部の学生、水柿大地くんは総務省所管の「地域おこし協力隊」に応募し、隊員として棚田再生の役割のために岡山県美作市上山に赴く。そこでの未知の世界と活動を通して結局ここに住みついてしまう経過をつつた本です。村というつながり、都市の人たちがつくる関係、そうしたいろいろなつながりのコラボが水柿くんの生き方を創っていくところに注目してください。

オススメ
04

「助けて」が言えない —SOSを出さない人に 支援者は何ができるか

日本評論社 松本俊彦 編
本体価格1,600円

他人に助けてと言いきくのが日本人の特徴の一つです。助けを求められない日本人の心理とはどのようなもののでしょうか。あるいは支援者自身が「助けて」と言えているのでしょうか。本書では、そもそも「助けて」と言わせることの違和感を捉え直し、依存先を増やす工夫をするなど、「依存のススメ」が提唱されています。これから様々な事柄を体験していく皆さんにとって、逆境に陥った際の道標となる一冊として、本書をお勧めします。

オススメ
05

福祉は誰のために

—ソーシャルワークの未来図

へるす出版新書 鶴幸一郎・藤田孝典・石川久展・高端正幸 著
本体価格1,200円

福祉はなぜ必要なのでしょう。貧困層なのに豊かに暮らす福祉を保障されない現状をどうすればいいのでしょうか。「自己責任論」が蔓延するなか、「本来の福祉」を実現するためにソーシャルワーカーは何をするべきかを考えさせる一冊です。専攻の如何を問わず、福祉・教育・財政など、多角的観点から社会問題への意識を深める契機をもたらしてくれるでしょう。

オススメ
06

ぼけますから、 よろしくお願いします。

新潮文庫 信友直子 著
本体価格590円

映像作家である著者の2019年発刊書籍の文庫本です。2017年の正月に母が娘に宣言した「今年はぼけますから、よろしくお願いします」という言葉がタイトルになっています。認知症や老老介護…まだ関係ないかな、と思われるかもしれませんが、母の想い、父の想い、娘の想いが沁み込むように伝わってくるのでおススメです。

オススメ
07

ふたつの日本

—「移民国家」の建前と現実

講談社現代新書 望月優大 著
本体価格840円

国境を越えて新しい国に移り住む人たちのことを「移民」と呼びます。日本には昔からたくさんの移民が住んでおり、特に1980年代以降その数は急増しています。しかし、かれらを私たちと同じ日本社会の一員として受け入れる考え方は、いまだに浸透していません。本書では、もはや「移民国家」といえる日本の現状と課題を詳細なデータとともに解説し、これから日本がどのような方向に進むべきなのかを論じています。

オススメ
08

『その日暮らし』の人類学 —もう一つの資本主義経済

光文社新書 小川さやか 著
本体価格740円

国境にも、日本に暮らす私たちが「あたりまえ」と思っている決まりごとにもとらわれずに、一日一日をたくましく生き抜く人たちの物語。日本でフツーに生きていきたい人には役に立たないけど、このまんま暮らしていくのは屈辱だと感じている人には元気をくれます。国境を超えた草の根の人々の新しい生き方を学ぶのに最適です。